

〔研究論文〕

ポストコロニアル博物館から考える植民地主義の記憶 —平和構築実践ネットワークに向けて—

〔Article〕 藤巻 光浩、若林 一平、椎野 信雄、塩沢 泰子*

Memories of Colonialism from Perspectives of the Post-colonial: Toward Praxis of Peace and Its Networking

Mitsuhiro FUJIMAKI, Ippei WAKABAYASHI,
Nobuo SHIINO, Yasuko SHIOZAWA

Abstract

This paper focuses on a series of postcolonial museums in China, Singapore, and Russia's Sakhalin. It attempts to theorize a perspective through which a museum could be brought to a fore as an object for critical inquiry. While a museum has been usually examined by a mundane and particular perspective, "transmission-reception model," within academic community, this paper holds a historical viewpoint by which a museum is subject to an integral constituent of nation-state and colonialism. Accordingly, this paper argues that a museum is saturated with syncretism in which its displays are not merely able to remain as such. The displays have to be scrutinized not as a static object, but as a performative vehicle for imminently posing within itself a possibility for social change.

I. 文化政治制度としての博物館（若林、藤巻 & 塩沢）

過去を訪ねることが、単なる郷愁であったり、あるいは懺悔であったりしてはいけない。そうではなくて、過去を訪ねることが現在と未来に向けたメッセージとの出会いでなければならない。

国家としての日本は、かつては大日本帝国と呼ばれる軍事大国だったのであり、今は経済大国として自他共に認めるところである。軍事大国から経済大国へ。まさに180度の大転換、見事な変身というほかはないのだが。しかし、考えてみるとそこにある共通点を見出すことができる。それは文化の貧困である。文化はしっかりと語り伝え、そして絶えず論理的なフィルターにかけてエッセンスを抽出しながら育てられてゆくものであろう。私達の行動にたしかな指針を与えてくれるのがインテリジェンスだとすれば、豊穡な文化の大地なしにインテリジェンスは育ちようもない。にわかごしらえでは通用しないのだ。

* 藤巻光浩（静岡県立大学国際関係学部助教授）、若林一平（文教大学国際学部教授）、椎野信雄（文教大学国際学部教授）、塩沢素子（文教大学国際学部教授）

** 本研究は、2005年度文教大学国際学部共同研究「平和教育としてのコミュニケーションの可能性Ⅰ:マス・メディアーションから考える、平和教育実践ネットワークの構築に向けて」および2006年度文教大学国際学部共同研究「平和教育としてのコミュニケーションの可能性Ⅱ:マス・メディアーションと証言から考える平和教育実践に向けて」に基づいておこなわれたものです。著者一同、ここに謝意を表します。

文化の貧困を解き明かす上で、公衆を対象とした記憶装置における情報の欠落、情報の意図的ないし無意識の遮断の検証は欠かせない。ひとつだけ例を挙げてみよう。靖国神社付属の戦史博物館である遊就館には1945年9月にミズーリ号の甲板で調印された降伏文書が展示されていない。現物はともかくとして複製品は比較的容易に手に入ると思われる。現にこの降伏文書は江戸東京博物館には展示されている。降伏文書の不在によって、戦争そのものの意味が全くわからなくなってしまう。遊就館を訪ねておもうのだが、昭和の戦争で日本が勝ったのか負けたのかすら不明なのだ。

この意味で、コロニアル・ポストコロニアル博物館に関して考察を加えることは意義が深い。コロニアル・ポストコロニアル博物館とは、日本並びに西洋列強による植民地支配以後建立され、それ以後も何らかのかたちで姿を変えながらも現在まで存続しているものを指す。「ポスト」ということばは、植民地支配以後という意味であり、決して植民地主義が終わったことを意味しない。むしろ、今もなお新植民地主義を顕在化する戦略的な意図を持つ呼び名であるⁱ。したがって、ここでは、コロニアル・ポストコロニアル博物館を、一語で「ポストコロニアル博物館」と表記することにする。

本来、博物館は「近代」というエポックの賜物であり、それが植民地支配と密接なつながりがあったことは疑いようもない。多くの物品が、植民地支配により当該地域から宗主国に持ち運ばれ、ヨーロッパにおいて博物館の展示熱が上昇した。その経緯を考えてみても、博物館が近代帝国主義・植民地主義とリンクしていることは明らかである。多くの展示品が帝国のはかり知れない膨張への野心の産物であり、またその展示方法が国民国家の境界線の明確な誕生を促し、またはその維持に本質的な役割を果たしたことも、近代博物館の「近代」というエポックとの関わりは無視することができない点であるⁱⁱ。前述した遊就館が、近代博物館である以上、今もなお植民地主義的で帝国主義的特色を持っていることは不可避なのである。

多くの場合、博物館は何かを「展示」することで情報を「伝達」し、人々に受け入れられ、その結果「共同体」を作り上げる装置として位置付けられている。これは、アルチュセールによる「国家イデオロギー装置」として博物館を位置付ける手法であり、博物館を一種の「洗脳装置」のように位置づける視点である。しかし、これに関しては、しばしば大きな誤解を招くことがある。その誤解とは、博物館を分析し批評するパースペクティブ、つまりコミュニケーション・モデルの考え方に起因する。

第一に、それは、博物館自身が何か情報を発信し、その結果博物館を訪問する人々がその情報を受け入れることによって「洗脳」が完成するという、「(情報)伝達受信モデル」として博物館の持つコミュニケーション的な側面を捉えるものである。しかし、この「伝達受信モデル」においては、まず人々が博物館に行くことが条件であるため、博物館に行かない人々に関しては、この「洗脳」が完遂しないことになる。したがって、博物館を「伝達受信」の装置として位置付けることによって、博物館の持つ本来の機能を、博物館に来た人々にしか発揮させることはない。これでは、博物館を文化研究の対象とする意義を失いかねない。

第二に、万が一多くの人々が来館することを前提としたとしても、博物館に来た人々が展示されたものを、そのまますべて受け入れるかどうかは不確定である。展示内容に対して疑問を持つこともあ

ⁱ 新植民地主義に関しては、例えば以下を参照。Etienne Balibar, *Masses, Classes, Ideas: Studies on Politics and Philosophy Before and After Marx*, trans. James Swenson, (Routledge, 1993).

ⁱⁱ 例えば、マッケンジー・M・ジョン『大英帝国のオリエンタリズム』（ミネルヴァ書店、2001年）などを参照。

るかもしれないし、その内容に興味を持つこともなく通り過ぎることもあるかもしれない。多くの場合、特定の目的を持って展示内容を吟味するということは、一般的な博物館の来館者においてはあまりないと言っても良い。したがって、博物館展示を、人々に伝達され受信される「情報」として扱うだけでは、近代において博物館が本質的な役割を担ったものとするのは難しいのである。博物館と人々との「つながり」が、情報の伝達と人々による受信によるものとして把握されているため、それが希薄で不確定なものに見えてしまうのである。そして、それは単なる「気晴らし」程度の扱いしか受けないことにもつながることがある。

その帰結として、博物館とは単なる「ハコモノ」に過ぎないものとして扱われ、「近代社会」形成とのつながりはある程度認めることはできるが、それ程のものではないと扱われることになってしまう。そして、展示内容、つまり発信する情報を何らかのかたちで適切に変化させることによって、受信者のマインド・セットを変化させることができるようになるという、コミュニケーションの「伝達受信モデル」から抜け出ることができなくなってしまうのである。その結果、この「伝達受信モデル」によって捉えられる博物館は、「洗脳」、よく言っても「啓蒙」という役割しか担うことができなくなってしまう。結局、このモデルにおいて、博物館は「教育的な機能」を洗脳であるとか啓蒙であるとかの機能を果たす言葉を与えられることにより、限られた機能を担わされることになってしまうのである。

ここで発生する大きな問題は、博物館は展示内容だけを適切に変えれば、「洗脳」という役割から逃れることができるかのような印象を与えてしまうことである。しかも、この問題は、博物館の分析・批評を行う際に多く用いられる「伝達受信モデル」に起因している。この「伝達受信モデル」においては、博物館の展示物には、無条件にある価値（ここでは「展示価値」と呼ぶ）が与えられる。その結果、博物館が内因的に展示物に与える（かのように見える）、「洗脳」であるとか「啓蒙」という役割も創出してしまっているのである。ここでは、個々の博物館における展示内容だけが問題とされるのであり、博物館の持つ見落とすべきでない社会的な機能は問われない。したがって、博物館に関する批評実践に求められているものは、博物館の展示物に無条件に展示価値を与えることになる「情報伝達受信モデル」を根本的に問い直すことであり、そしてそれに変わる代替モデルを提示することである。その結果、博物館を単なる一種中立的な「ハコモノ」としての地位から引きずり落とし、従来とは違うかたちで、近代の産物であることを前景化させることが求められているのである。

特に、植民地支配において建てられたり、また植民地解放以後修復されたり建て替えられたりした博物館、つまりポストコロニアル博物館をめぐる問題系に注目することは、以上まで述べてきたことに関して特に意義が深い。この問題系を一つにまとめるなら、以下の問いに集約させることができる。ポストコロニアル博物館は、植民地支配前と解放後では機能が根本的に異なるのか、という「問い」である。植民地時代、宗主国の威信を輝かせるために博物館は、「洗脳」を行う役割を担い、解放以後は新しい価値観の元に「洗脳」は行うことはやめ新しい社会を作り上げるための「啓蒙」的機能を担っているという考え方においては、植民地時代を非難し、現在においては新しい価値観を創出するという目的を担われている。ここでは、はたして博物館は「解放」以後も、近代的な役割を担い、そして博物館を見る視点、パースペクティヴも解放されたのか、ということをお問わなくてはならない。

この論においては、特に、東アジアにおけるポストコロニアル博物館の一部に重点を置いた。なぜなら、ポストコロニアル博物館が上記の「問い」に答えることが出来る歴史的位置に存在しているからである。ここにおいて分析するのは、中国、シンガポール、サハリンの博物館についての報告となる。まず第一に、いくつかのポストコロニアル博物館の類型を整理したい。そして、第二に、それぞれの類型の社会において果たしている文化政治的機能を分析してみたい。この二点については、以下の第二セクションにおいて述べたい。そして、最終セクションにおいて今後のポストコロニアル博物館へのアプローチのあり方を示唆してみたい。

II. ポストコロニアル博物館の類型とその機能(若林、椎野、& 藤巻)

ポストコロニアル博物館といっても様々な類型が存在する。ここで報告する類型と機能は、以下の三点に整理される。第一に挙げられるものは、ポストコロニアル博物館を史実を再現するという目撃機能を果たしているものとして分類する視点である。この類型・機能に関しては、若林が担当する。第二に、ポストコロニアル博物館を、反帝国主義・反植民地主義としてのナショナルアイデンティティ創出装置としてみなす視点である。この類型・機能に関しては、椎野が担当する。第三に、ポストコロニアル博物館を、未完の文化政治的制度として見なし、その結果、その制度を脱臼させることの可能性を見いだす場として見る視点である。この戦略的視点に関しては、藤巻が担当する。

1. 史実再現・目撃機能を果たす装置：大連・長春の場合（若林）

大連は中国遼寧省遼東半島の東端に位置して、天然の良港を持ち、現在2000社以上の日本企業が進出している。日本企業が集まる工業団地も存在する。大連はかつて日本帝国の大陸進出の玄関口であった。ロシアとの関係抜きに語れないのは樺太と同様である。

清朝の弱体化に乗じて、1860年、北京条約でロシアは沿海州を獲得して、南下政策を本格化させる。日清戦争の結果（下関条約）、日本が遼東半島を領有することに反対するロシア・ドイツ・フランスの三国は、1895年清国への返還を要求、日清間に遼東半島還付条約が締結される。これがいわゆる三国干渉である。これ以降列強の清国分割が本格化してゆく。

ロシアによる東清鉄道工事が本格化して、1898年には清国から旅順・大連を租借し、1899年にはロシアによる大連の都市建設が始まる。当時の呼び名はロシア語でダーリニー（「遠い」という意味）である。ロシアによる大連の都市建設が本格化した矢先に、1905年、日露戦争の講和の結果主役はロシアから日本に交代し都市名もダーリニーから大連と変わる。

ちなみに大連は、1945年の日本敗戦後はソ連の管理下に入り、1949年の新中国（中華人民共和国）誕生後の1951年になってから中国に返還された。1972年の田中角栄・周恩来会談、日中共同声明によって、大連は全中国の日本語教育センターになり今日に至っている。

今回の歴史記憶検証作業の最中、2006年、かつて日本の大陸進出の玄関口だった大連に生まれ育った二人の知識人が相次いで亡くなった。香内三郎と清岡卓行である。

香内三郎は1931年大連生まれ、マスコミュニケーション論、イギリス言論史を専攻していた。近著として、『読者の誕生 活字文化はどのようにして定着したか』（晶文社、2004）がある。香内は中学生の年齢まで日本の植民地で生活していた。満州については共著で『満州 昨日今日』（新潮社、1985）の著書がある。この書は今回の検証チームが2005年12月に中国吉林省長春にある偽満皇宮博物院の書籍部で勧められた唯一の日本の出版物であった。この本の中で香内は「満州」とは何であった

のか、を明らかにする仕事はまだ終わってはいない、と言っている。植民経験とは何であったのか、未だ釈然としないのだ。大陸でも南方でも植民地特権を失った「日本人たち」はひたすら「本国」へと急いだのだ。

全く立場をかえた日系移民として残っていたならば、どうだったであろうか。とよく考える。アメリカの日系コミュニティをモデルに考えるならば、おそらく、私の子や孫は、日本語を話さず、中国語を話し、中国社会に溶けてゆくのではないか。ともかく、私たちの「満洲」経験はなんとなく締めくくりがつかず、宙に浮いているⁱⁱⁱ。

もうひとり清岡卓行である。1922年大連生まれ、芥川賞作品の『アカシヤの大連』（講談社、1975）はまさしく清岡の植民地体験を題材としている。「アカシヤの大連」は次の文章で始まる。

かつての日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに横に振るだろう。見たくないのではない。見ることが不安なのである。もしもう一度、あの懐かしい通りの中に立ったら、おろおろして歩くことさえできなくなるのではないかと、密かに自分を怖れるのだ。^{iv}

なぜ、また何を清岡は怖れるのか。それは彼のもつ知識、想像力、そして感性のゆえであろう。要は自分自身に揺れ動く内面が存在するからなのだ。別の文章「サハロフ幻想」の中で清岡は次のように言う。

サハロフ。侵略を前提とした建設者であったきみを、わたしは否定する。植民地の子であったわたし自身を、わたしが否定するように。しかし、きみの建設の芸術性を、わたしはどこまでも高く評価する。それは永く、大連という都会独特な美しさを支えるだろう。そして、その美しさを、きみと同じように、わたしもまた心の底から愛するのだ。^v

ちなみに、サハロフとは、19世紀末に、帝国主義国家として最初に満洲を席卷したロシア帝国の都市計画技術者である。清岡が美しいと絶賛する大連の町並みは他ならぬサハロフが設計し、日露戦争の結果ロシアが撤退する直前の1905年まで、彼が市長をも兼務して街路、広場、そして建物群の建設を進めていたのである。

清岡は大連という都市の美しさを自分は愛すると言う。清岡の大連への愛は、都市という対象を見る人に自己を限定して、いわばそこで思考停止しているのである。但し、清岡の感性を、日本も大陸で良いことをしていたというおよそ無反省な感性とは同一視できない。ロシアがヨーロッパ都市のコピーを満洲に移植し、ロシアがもたらしたコピーを日本が受け継いだ。日本の敗戦でソ連が、次いで中国共産党が満洲を実効支配する。清岡は、そこに見られる文化の連続性をロシア人サハロフの目を通して再現してみせるだけである。香内が指摘する「締めくくりがつかない宙に浮いた」植民地経験に対する清岡の回答はそこには無い。

大連には日本時代の建築物が多数現存し、また近年史跡としての保存の動きも加速している。いわば、街中博物館として機能しているのである。代表的な建築物としては、旧名称を挙げてみると、南満州鉄道（満鉄）が経営していた大連ヤマトホテル（現大連賓館）、大連市役所（現中国工商银行）、横浜正金銀行大連支店（中国銀行）、東洋拓殖大連支店（中国交通銀行）、関東通信局（現郵政局）、

iii) 松本栄一・香内三郎・水上勉『満州 昨日今日』（新潮社、1985年）、21頁。

iv) 清岡卓行『アカシヤの大連』（講談社、1970年）、87頁。

v) 清岡卓行『アカシヤの大連』（講談社文庫、1988年）所収「サハロフ幻想」、313頁

大連警察署 (遼寧省対外貿易合作庁)、満鉄本社 (現大連鉄道有限会社)、など枚挙に暇がない。

この街中にあふれ出るこれらの文化遺跡を現代中国の知識人はどう捉えているだろうか。その一例を写真家の呂同挙に見ることができる。大連の古い建物の写真集の中で、彼は次のように言う。^{vi}

凝固した鉄筋コンクリートの背後には、豊かな文化意識と形態の審美芸術志向が蓄積され、歴史を記録する立派なモニュメントとなっている。これらの建築物を見ていると、まるで抽象的な歴史がよみがえり、豊かになったように感じるときがある。歴史を通して建築物は、そこで発生した事実を目撃し、更にその一部は未来にまで存在し続けて行くのである。¹

ここに見られる文化意識は清岡の場合と些か異なる。呂同挙の場合は、モノとしての文化そのものに語らせるといふ考えがあるのだ。清岡も呂も文化を相対的に自立的に見る点では共通している。歴史の目撃者としての文化という呂の捉え方。このような文化の捉え方は、方法としてはいわば自覚的抽象化とでも言えよう。

日本時代の建築群が目を開くのは満州国の首都であった旧新京 (長春) である。史跡の修復保存が大連同様に行われている。満州国皇帝溥儀の皇宮は修復再現されて偽満皇宮博物館として公開されている。ジオラマが多用された展示手法は他の現代中国の博物館とも共通する。関東軍吉岡参謀と溥儀の会見風景、アヘンを吸う溥儀の妻・婉容、また日満議定書調印式会場も再現されている。

満州国の官庁街も当時の姿を彷彿とさせる偉容ぶりである。偽満州国八大部と称してほぼ当時の姿を留めているのだ。八大部とは、軍事部、司法部、經濟部、外交部、文教部、交通部、興農部、民生部、の八つである。他にも、日本の国会議事堂をまねた國務院、満州中央銀行、関東軍司令部、などが往事の姿で保存され再利用されているのだ。満州国皇帝の宮殿となるはずで未完成のまま日本の敗戦を迎えた建物は当初の設計図により1953年に完工して現在地質宮として使われている。満州国の首都の展示都市としての長春も、大連と同様に、都市そのものが博物館に見立てられていると言えよう。長春の中心を南北に延びる満州国官庁街は現在の新民大街であり、その新民大街の北の突き当たりが地質宮、つまり溥儀の本来の宮殿となるべきだった建物である。

満州国の諸官庁の建物は興亜式とよばれ、西洋式のビルの上に東洋風の屋根を葺いた独特の構造を持つ。興味深いことに、新民大街で後に建てられた建築物も興亜風の本体と屋根を持っているものが見られる。その理由は街の景観の統一のためだという。

検証チームが訪問した長春の12月はまさに酷寒の地である。日中でもマイナス二十度はあたりまえ。長春ですら広い満州の中では中心よりも南よりなのだ。香内三郎も指摘していることだが。移民計画自体が官僚の机上計画以外のものでもなかった。酷寒の満州という一点だけから考えても、王道楽土のかけ声とは裏腹に、百万戸移住計画は夢のまた夢だったと言えよう。そして、その不可能な夢の歴史を今もなお目撃しているのが、博物館としての大連と長春なのである。

2. 反帝国主義・反植民地主義としてのナショナル・アイデンティティ創出装置：シンガポールの「旧フォード工場の記憶」(Memories at Old Ford Factory) 博物館の場合 (椎野)

東京・成田国際空港から飛行機で約7時間30分で到着するシンガポールのチャンギ(Changi)国際空港に降りたって、入国審査を抜けた所に、観光客用に幾つかの観光パンフレットが置いてある。英語で書かれたこれらのパンフレットを手にする日本人観光客は、ほとんどいない。ということは、これらのパンフレットの中に、シンガポール政府観光局(the Singapore Tourism Board)の作成した

^{vi} 呂同挙撮影『大連・古い建物』(大連出版社、2003)、5頁。

「Uniquely Historical Singapore World War II Self Guided Trails」(ユニークな歴史のシンガポール第二次世界大戦 自己ガイドの路)があることに気づく日本人はほとんどいないのである。

このパンフレットは、「序文」「砦・大砲・戦闘の：南路」「英雄・反乱者・指導者：中央路」「有刺鉄線の後ろ：東路」「記念碑で：北路」「シンガポールの第二次世界大戦」から成っている。「南路(The Southern Trail)」ではラブラドル・パーク(Labrador Park)、リフレクションズ・アット・ブキ・チャンドウ(Reflections at Bukit Chandu)、シロソ砦(Fort Siloso)、アレキサンダー病院(Alexandra Hospital)が、「中央路(The Central Trail)」ではフォート・カニング・ヒル(Fort Canning Hill)とバトル・ボックス(The Battle Box)、セント・アンドリュース教会(St. Andrew's Cathedral)、官庁地区の記念碑・記念物(The Civic District Monuments & Memorials)、YMCAシンガポールが、「東路(The Eastern Trail)」ではチャンギ礼拝堂・博物館(Changi Chapel & Museum)、ジョホール・バッテリー(Johore Battery)、セララング・キャンプ(Selarang Camp)、チャンギ刑務所(Changi Prison)、チャンギ・ビーチ(Changi Beach)が、そして「北路(The Northern Trail)」では克蘭ジ戦没者共同墓地・記念碑(Kranji War Cemetery & Memorial)、日本人墓地公園(The Japanese Cemetery Park)、克蘭ジ保護区公園(Kranji Reservoir Park)、ブキ・バトク自然公園(Bukit Batok Nature Park)、旧フォード自動車工場(Old Ford Motor Factory)が、紹介されている^{vii}。

これらの様々な博物館・記念碑などの中から、今回、注目したいのは、最後の「旧フォード工場」である。昨年まで、シンガポールの(所謂)戦争博物館といえば、2002年から再開されたセントーサ島(Sentosa Island) (レジャー・アイランド)にある観光客相手の「イメージ・オブ・シンガポール」(Images of Singapore)であった。ロウ人形を中心に14世紀から20世紀までのシンガポールの歴史を「シンガポールの開拓者」「降伏の間」「シンガポール祭事館」の3部構成で展示していた。特に「降伏の間」には、旧日本軍の占領から降伏までの歴史が再現されていた。2004年から1年間の改装工事を経て、2005年7月に増築されリニューアル・オープンされた時、4つの展示室となり、「Four Winds of Singapore」「Singapore Adventures」「Singapore Celebrates」「Celebration City」の展示がある。戦争関連の展示は、同島にあるシロソ砦に移動され、博物館内の「降伏の間(Surrender Chambers)」には第二次世界大戦中の(日本占領下時代の)シンガポールの様子がロウ人形で再現さ

vii) ラブラドルには、ケッペル港を防衛する砦が築かれ、砲台が設置されていた。機密トンネル(Secret Tunnels)が見学できる。ブキ・チャンドウは、パシル・パンジャン(Pasir Panjang)戦跡にあるオピウム・ヒル(Opium Hill)のこと。シロソ砦は、今やレジャーアイランドになったセントーサ島の西端にある要塞跡である。イギリス植民地時代の要塞で唯一保存されているもので、一般観光客が身近に見学できる展示となっている。アレキサンダー病院は、陸軍病院であった。フォート・カニング・ヒルは、マレーのサルタンの築いた要塞があった所だが、英国植民地時代の軍司令部および日本占領時代にも軍事目的で使用された。元英国軍司令部の「戦争ボックス」が見学できる。このパークにある切手博物館(Philatelic Museum)の歴史ギャラリー(History Through Stamps Gallery)では、英国植民地時代・日本占領時代・マレーシア連邦時代・現在の切手を通してシンガポールの歴史を見ることができる。セント・アンドリュース教会は英国教会の教会で、戦時中は臨時の病院だった。シティ・ホール(市庁舎)駅の近くにある戦争記念公園(War Memorial Park)には「日本占領時期死難人民記念碑」(Civilian War Memorial) (「血債の塔」)が建てられている。林謀盛の顕彰碑(Lim Bo Seng Memorial)は、抗日英雄として讃えられているリン・モウ・シヨンの記念碑である。インド国民軍記念碑(The Indian National Army Monument)や両大戦の戦没者のためのセノタフ(慰霊碑)(英軍戦没者記念碑)もある。YMCAの建物は日本の憲兵隊の本部として使われた。チャンギ刑務所は、日本軍捕虜の収容所として使われた。これらの捕虜によって建てられた礼拝堂と、博物館が刑務所の敷地内にある。チャンギ・ビーチは、戦争中は、「華僑抗日分子」の大量虐殺・処刑が行われた場所の一つである。ジョホール砲台(チャンギの大砲)のトンネルもある。セララング収容所キャンプもあった。克蘭ジ戦没者記念碑は、英兵の忠霊塔である。日本人墓地には、戦争前にシンガポールで亡くなった日本人が埋葬されている。シンガポールのほぼ中央には国立公園にもなっている自然保護区がある。ブキ・バトク自然公園にはかつて昭南忠霊塔(神社)があった。旧フォード自動車工場は、日本軍の前方本部として使用された。

れている^{viii}。

さて、旧フォード自動車工場は、今年2006年の2月に、シンガポール政府の「国立文化遺産局(National Heritage Board)」の一機関である「シンガポール国立公文書館(National Archives of Singapore)」(NAS)によって、第二次世界大戦のギャラリー(展示室)および収納庫となるように建物が改装され、「記念物保存局(The Preservation of Monuments Board)」(PMB)によって、国立記念(建造)物(national monument)として保存されると広報されたのである。ギャラリーは、「旧フォード工場の記憶(Memories at Old Ford Factory)」と呼ばれ、2月16日に公式に公開され、一年間は(2007年2月20日まで)展示ギャラリーへの入場は無料となっている^{ix}。

この工場は、1941年にフォード自動車(Ford Motor Works)によって建築されたが、東南アジアで初めての自動車組み立て工場であったようだ。旧フォード工場の建物の会議室で、1942年2月15日に、イギリス(連合)軍のパーシバル中將(Lieutenant General A.E.Percival)から日本軍の山下泰文中將(Lieutenant General Yamashita)への降伏の文書が調印されたのだ。翌日から(3年6ヶ月の間)シンガポールは、昭南島(Syonan-To)と改名された。このことの意味は、アジアにおける西欧列強のうち最強のイギリス植民地主義(西欧優越の神話)の終焉であり、日本の占領の開始であった。1941年にアジア・太平洋戦争が開始され、1942年2月8日に日本軍はシンガポールに総攻撃を開始し、降伏させ、シンガポールを占領下においたのだ。

現在のシンガポール地域は、15世紀中頃にシャム・アユタヤ王国から独立したムラカ(マラッカ)王国(現在のマレーシア・シンガポール・インドネシア東部)の一部であった。その(貿易国であった)ムラカ王国を16世紀の初め、ポルトガルが攻撃し、占領した。追われた王家は、シンガプーラにジョホール王国を創設したが、ポルトガルは17世紀初めに、シイガプーラを攻撃し、破壊した。19世紀になり、1819年にイギリス東インド会社の書記(サー・トマス・スタンフォード・)ラッフルズが(シンガプーラ改め)「シンガポール」に中継港(無関税の自由港)の建設を開始した。1824年に英蘭条約を締結の後、イギリス(東インド会社)はムラカを占領・獲得し、ジョホール王国を管轄下にいれ、1826年にシンガポールを含め英領海峡植民地に編入した。1858年に東インド会社が解散し、海峡植民地はイギリス国(植民地省)の直轄植民地となった。その後シンガポールは、東南アジア随一の貿易都市になっていった。

1945年の日本軍無条件降伏の後、直ぐに今の「シンガポール共和国」が誕生したわけではない。まず、シンガポールは、イギリスの植民地に再びなったのだ。長年の独立交渉の結果、1959年にイギリス連邦内の自治州となった。そして1963年に12番目の州としてマレーシア連邦の結成に参加し、独立を達成した。その後、(マレー人と中国人)民族対立の中、1965年にマレーシア連邦から追放され、「シンガポール共和国」として独立した。「生存のための政治」(リー・クワン・ユ(李光耀)の人民行動党(PAP)政権)の始まりである。1990年にゴー・チェクトン(吳作棟)内閣、2004年からはリー・シェンロン(李顯竜)内閣が誕生している。

旧フォード工場のギャラリーの展示(昭南時代:日本統治下のシンガポール)は、マラヤの第二次世界大戦の歴史と日本軍の占領時代の人々の生活が中心である。旧フォード自動車会社の会議室から

^{viii} この博物館は、セントーサ開発株式会社のものだが、実質的にはシンガポール政府による観光客向け展示である。その他で太平洋戦争の展示がある所は、晩晴園(孫文記念館)やシンガポール歴史博物館(旧国立博物館、1887年開館)およびチャンギ博物館である。これらは「ポストコロニアル」博物館である。

^{ix} 住所: 351 Upper Bukit Timah Road Singapore 588192 Website: www.s1942.org.sg

展示は、Syonan Years: Singapore Under Japanese Rule, 1942-1945(昭南時代:日本統治下のシンガポール)である。

始まり、昭南島時代の日本占領時の人々の生活の詳細の物語が陳列されている。

この展示の特徴は、「Syonan(昭南)」時代という表現が、日本統治下のシンガポールを展示する時に使用されていることである。セントーサ島の観光客対象の「降伏の間」では小さくしか表現されていないが、ロウ人形の展示が目立っているが、戦争年代(The War Years 1942-45)が強調されていただけである。展示資料の内容には、大きな差異はなかった。しかし、このSyonanという地名の使用には、日本占領時代の象徴的意味が込められていることに気づく、日本語人は多くはないだろう。このギャラリーを公開したシンガポール政府の強調点は、このような展示で日本占領の歴史を忘れないことの教訓というものが、自己防衛の不可能のもたらす代償・代価の大きさということなのである。国家の平和と安全保障は当たり前のことではなく、自己防衛は独立国の国民の義務だというメッセージである。

シンガポールの一連の(所謂)戦争博物館の展示は、政府主導の「ポストコロニアル」博物館・記念碑・記念物的展示となっている。先に見たように、シンガポール(シンガプーラヤムカラ)は、16世紀から、300年間のポルトガル占領、100年のイギリス植民地、3年半の日本軍占領、そして戦後の再植民地化その後の20年近い植民地独立運動という歴史を持っている。現シンガポール政府は、戦争博物館を、反帝国主義・反植民地主義の立場から明確に位置づけている。博物館へのパースペクティブとしては、古典的・近代的な「通信」コミュニケーションモデル(啓蒙・洗脳装置)の再生産である。明確な帝国主義・植民地主義ではなく、明確な反帝国主義・反植民地主義という立場からの再生産ではあるが。

シンガポール政府(実質的に「人民行動党」(PAP))の政治スタイルは、「上からの統制」と「国家による愛国心(ナショナリズム)の注入」が特徴であると言われている。「生き残りのイデオロギー」として強調される価値観は、1. 国家利益を決定するのはPAPである、2. 国民すべてが国家利益への自己犠牲と愛国心を持つ、3. 「多文化主義」、4. 「能力主義」(メリトクラシー)、となっている。「創造すべき未来があるのみ」と国民に呼びかけているのだ。

シンガポール政府は、こうした未来主義のために、記憶の博物館をどのように活用するのか。その答えは、ポストコロニアル博物館であり、反植民地主義であり、多文化主義を強調しつつ、愛国心や自己犠牲の精神を持つように、国民に伝達することなのだろう。従って、そのことは、最も最近の「国立記念物」としての旧フォード自動車工場ギャラリーに現れているのだ。日本占領の歴史の記憶を展示することによって「自己防衛」の国民義務をメッセージとしたギャラリー「昭南時代：日本統治下のシンガポール」を公開するのは、まずもってシンガポール国民向けであり、旧宗主国の日本人向けではないのだ。このことは、チャンギ国際空港での英文観光パンフレットの位置づけ(日本語観光パンフレットは置いてないということ)を説明してくれる。

しかしながら日本人向けではない観光パンフレットは、シンガポールの公用語である英語で書かれているが故に、その情報は、シンガポール国民を越えて、英語使用者である世界の観光客には、伝達されているのである。このような「戦争」博物館のあり方について、日本語サイドの人々は、もう一度、再検討する必要があるのだろう。

3. 戦略的ポストコロニアルとしての装置：サハリン郷土資料館の場合(藤巻)

サハリンの州都、ユジノサハリンスク市街地の主要道路の一つ、コミュニチェスキー(共産党)通りにこの博物館は位置している。近くにチェーフ劇場や大学があったり、ガガーリン公園も近くに配置されていることを見れば、この地区はユジノサハリンスクにおける一種の文教地区ということが

できるだろう。この博物館は、1896年12月6日にその実体は形作られたとされているが、現在の建物は1905年のポーツマス条約以後、この地の南半分を日本が割譲した結果1938年に出来た樺太庁博物館のものである。現在の博物館は、旧ソ連により1946年5月11日に開館の運びとなった。そして、北サハリンのアレクサンドロソフにあった郷土資料館の資料や展示物がここに集約され、有機的な展示になったのは、1950年代初頭のことである。

建物の形態は、日本的な情緒を色濃く残すもので正面玄関には狛犬も配置されている。現在は、サハリンにおいてその容姿が非常にエキゾチックに見えるため、「カッコイイ」場所として結婚式の写真撮影に利用されたり、市民の憩いの場として利用されている^{x)}。すでに還暦を迎えたこの建物は、修復計画が日本政府との間で取り交わされてきているようであり、修復後は「日本館」として機能し、現在のコレクションは別館に収められるようである。

この博物館は、昔も今も間違いなくコロニアル博物館である。現サハリンは、17世紀以後ロシアが南下を始めそれに脅威を感じた江戸幕府・明治政府が北方への興味を抱く以前、国民国家の領土として存在していなかった。アイヌやニブヒらが居住していたが、それは国民国家による支配とは違うノマド的形態のものであった。よって、1905年以後のサハリンは、その南部が明治政府によって領有され植民された結果出来上がったものであり、旧樺太庁博物館はこの経緯の中で誕生したポストコロニアル博物館なのである。同様に、1945年以後、この地がソ連軍により領有されてからはソ連領になった。

展示内容は、サハリンの自然、地理、歴史、文化を中心におこなっている。一階が自然博物館としての役割を果たし、二階が文化、地理、歴史博物館として機能している。一階の自然科学的展示は、どの郷土博物館にもある有史以前の生物の存在を裏付ける化石の展示や標本で埋まっている。しかし、二階の文化、歴史、地理に関する展示室は、この博物館がコロニアル博物館であることを特徴付ける展示にあふれていた。

まず、歴史、地理に関する展示であるが、日本から来た訪問者の興味を引くものが多い。間宮林蔵の軌跡を正確にたどった展示は、「サハリン」という土地の地理的輪郭が明確になった契機として展示されている。歴史的な物語に関しては、この地がロシア領に1945年に「回復」したことを、特徴付ける手法が採られている。英語ナラティブがウェブサイトに掲載されているが、そこでも、サハリンは1945年に“retained”された、という表現が採用されていた^{x)}。

この博物館においては、「サハリン」がロシアの郷土のひとつとして位置付けられていることがよく分かる。上にも記した一階の自然科学的展示における物語は、多くの自然博物館に典型的なものであるが、この地が有史以前から「サハリン」という地であったことを錯覚させるものである。「サハリン」という名前が与えられることにより、この地に生息してきた動植物や鉱石の一つひとつまでもが「サハリン」「ロシア」という土地・政治体制に塗りかえられる様は、まるで錬金術のようでもある。

そして、その土地をロシアのものとして書き換えるナラティブにおいて、決定的な役割を果たしているのが「文化」展示である。その文化展示に関して、最もスペースを割いて展示しているのが、先住民の「文化」展示である。

^{x)} この点に関しては、北海道新聞のサハリン駐在の記者、山野辺亨さんより情報をいただいた。

^{xi)} サハリン郷土博物館にはウェブサイトがあり、英語バージョンも存在する。この記述は以下の頁からのものである。
“The Sakhalin Regional Museum” <http://museum.sakh.com/eng/2.shtml>

まず、訪問者を恐怖のどん底につき落とすものが、二階展示室の入り口前に配置されている。それは、この博物館の誇りにする「コレクション」であり貴重な「人類学的な資料」の一つであるために、二階展示室の始めに置かれている。それはアイヌの人骨の展示である^{xii}。

この博物館において先住民の文化展示は、博物館という制度にとって重要なある機能を与えている。それは、先住民はサハリンからいなくなったことを示すという機能である。「すべてのアイヌは、1945年以後、日本に送還された」という記述からみても、アイヌはすでにサハリンには存在していないことを表している^{xiii}。また、ニブヒヤオロコの衣装や生活用具の展示は、古い写真とともに展示され、現在の彼らの生活の様子が記述されていない。これは、特に主流派らの創る先住民に関する博物館においてみられる典型的な展示方法であり、所謂「滅びゆく先住民史観」に基くものである。これは、先住民は、現在は滅びてしまったか完全に同化してしまったかのどちらかで、純粋な先住民は死に絶えたという歴史観に基くものである。この歴史観は、血の純潔を求め民族の構成要件として、それを先住民だけに求めるものであり、それ故に先住民を民族的に不可視なものにしてしまう典型的なものである。逆に、「主流派」民族の血の純潔性は決して要求されることがない。つまり、血の純潔や生物学的本来性を備えた民族性を先住民だけに求める視点は、間違いなく「主流派」のものであり、先住民の存在をなきものにする植民地主義的なものである。

したがって、先住民の文化に関する展示は、「過去」のものに限られ、博物館においては過去の展示が最も適したものになる。「過去」をそのまま展示することにより、博物館の展示価値は上がるばかりである。しかし、上にも書いたとおり、先住民の「現在」の生活は記述されることはなく、しかも、すでに「滅びた」ものとして扱われるため、「過去」の「滅びた」文化を展示する博物館の使命は、たとえその展示方法がどのようなものであっても、意義あるものとして称賛されることになる。本来、文化展示においては、現在の文化のあり方などもあわせて展示しなくてはならないが、このような博物館においては文化は「過去」のものとして展示されるために、展示内容の正当性だけでなく制度としての博物館自体の存在価値まで謳いあげることになるのである。

先住民の文化展示は、文化保護・継承の意義を強調しながらも、逆に「制度としての博物館」の機能を正当化しながら、その制度を維持・強化する国民国家の姿を不可視にしてしまう。虐殺され、同化を強いられた先住民の存在を不可視にすることで、その同化政策の責任主体である国民国家の姿を不可視にする。その一方で、「消滅した過去」の遺産を保存する責任主体としての国民国家体制と一体になった博物館の姿が前景化されるのである。その結果、先住民文化の展示は、博物館の存在の正当性、その博物館を維持する国民国家の正当性を可能にしてしまうのである。

しかし、この博物館において展示されているアイヌの亡骸そのものは、この地が、「サハリン」でありロシア領であることを何も示すことはない。これは、(博物館側からすれば)恐ろしいことでさえある。墓を暴く様子を写した写真展示は、サハリンならびにロシアが、先住民文化を保護するという名目を必死になって探す強い欲望しか露呈しないのである。したがって、墓を暴く写真展示やアイヌの骨展示は、決して文化保護を求める先住民の声が聞こえてくる場所ではなく、むしろサハリンが

^{xii} 2005年9月に訪問した折に、この人骨展示に遭遇した。2006年9月に訪問したときには、修復のためその人骨を展示してたケースだけが空のまま配置してあった。

^{xiii} ウェブサイトのナラティブは、博物館内のロシア語のナラティブと内容的にほぼ対応していることを通訳ガイドを通して確認した。英語のナラティブは、以下の通り。“At present we have only museum exhibits to remind us of the Sakhalin Ainu, whose fortune turned out to be sad. After 1945, all who remained were evicted to Hokkaido.” (“The Sakhalin Regional Museum,” <http://museum.sakh.com/eng/10.shtml>)

ロシア領であることを希求するロシアという国民国家の欲望の顕在化する場所なのである。この地が植民地主義的な野心によって領有されたことを示す痕跡が、図らずも見い出されてしまう場所なのである。(もし「滅び行く先住民史観」が日本人の頭にインプットされていたら、もちろんロシアだけでなく日本という国民国家によってもである。)

したがって、この博物館は植民地「回復」以後も、「解放」を装いながら先住民の声を奪い続ける植民地主義的なものであり、植民地主義を今も維持するポストコロニアル博物館なのである。博物館は、展示「物」の「声」が領有される場所であってはならない。むしろ、展示「物」が「制度としての博物館」の中で再文脈され、新しい見え方(つまり声)が顕れるところであるべきであり、それを顕在化させる議論・批評が常に行われる場所であってはならない。

III. ポストコロニアル博物館へのクリティカルなアプローチの模索 (藤巻&若林)

人びとの記憶の形成において決定的な役割を果たしているのが、マスメディアであることは疑いの余地がない。博物館もまたこのマスメディアのひとつであり、ナラティブの一つひとつについての丁寧な考察が必要である。けれども、他方では欠落部分の洞察が欠かせないとテッサ・モーリス・スズキは言う。

大衆的な歴史表現の考察のなかで、特定のマスマーケットで語られる物語が過去の理解に及ぼすインパクトを分析するだけでなく、それを超えたむこうにもいってみたいとわたしは思っている。とくに関心があるのは、大衆メディアが過去の想像風景を、語ることだけでなく沈黙によっても、さりげなく形成することである。^{xiv}

沈黙による想像風景の形成という切り口の設定。この方法論はヘーゲルの論理学を想起させる。有と無の弁証法である。饒舌が有とすれば、沈黙はまがいなく無であろう。あらゆる言説は有と無との関係の最中に存在している。こうした関係の自覚はとりわけメディア研究において必要とされるであろう。

文化を育てる論理的フィルターは、有と無との関係の自覚の上に成立するものであろう。その上でこのフィルターは国際的な互換性の世界と接点を持つものでなければならない。それは単に「国際」標準にすり寄ってゆく事を意味しない。逆に自ら「国際」的な標準を作る、あるいはそのような共同作業に参加してゆく中で形成されるべきものであろう。このようにして文化は国際文化となってゆくのでなければならない。

つまり、博物館は、単に情報を伝達し受容させる場ではない。むしろ、博物館の存在自体が、すでに情報の伝達と受容がなされたことを前提としているのであり、博物館展示を単なる情報として扱うことで不可視になるものがあるということである。ここで不可視になったものとは、過去を展示することにより博物館展示が正当化したまさしく、「文化政治制度としての近代博物館」であり、文化保護を担うことで可能になった責任主体としての近代博物館の果たす役割である。したがって、この不可視になった部分を「無」として扱い、見えている部分、つまり「有」の存在価値・基盤を揺るがせる戦略が、博物館を考察する視点に求められているのである。つまり、博物館自体は、展示物を「有」の「情報」としてのみ扱う制度であることを認識することであり、それと同時に「無」として不可視になってしまうものを顕在化させなくてはならないのである。「文化政治的制度としての近代博物館」

^{xiv} テッサ・モーリス・スズキ著／田代泰子訳『過去は死なない メディア・記憶・歴史』(岩波書店、2004年)、20頁。原著はTessa Morris-Suzuki, *The Past Within Us: Media, Memory, History*, Verso Books, 2005.

は、「無」を本当の「無」として忘却しようとする博物館の存在自体の欲望が顕れる場なのである。したがって、博物館は、展示をするという制度的実践の中で、「国民」にアイデンティファイする人々を含む国民国家の欲望を露呈しつつ、それを不可視なものとして漂白しようとしているのである。

このような視点から見える博物館ならびにそこでの展示情報は、博物館自体が自己漂白を希求する欲望に射抜かれていることを露呈してしまい、それ故にその展示情報をさらに文化政治的に活性化させることの可能性が、その「ゆらぎ」の中に満ち溢れているのである。例えば、サハリン郷土博物館の場合には、アイヌの亡骸展示において図らずも、自らの視点を正当化しなくてもすることが不可能であることが露呈してしまった中で、自己漂白化を図ろうと文化政治的権力を行使しようとする場所であり、それ故にその存在が「ゆらぎ」を経験しているのである。同様に、シンガポールの博物館の場合には、一見内向きでナショナリズム的なものに見える展示内容が英語ということばの持つ越境性により、日本の遊就館の紡ぎ出すナラティブにまで「ゆらぎ」を与える可能性を持っているのである。また、大連や長春の場合、日本の帝国主義の遺産である建築群が、旅行者として越境してくる「日本人」に、植民地支配の史実を目撃させ、そのナショナル・アイデンティティ形成に「ゆらぎ」を経験させるのである。

従来の「情報伝達モデル」においては、完結してしまっている「展示情報」のあり方は、この論で提示した視点により、さらなる討議・批評の可能性を開示してゆくことになるのである。個々の展示「情報」は常に、近代博物館という歴史的な文脈を持つ制度により裏書きされる一方で、それが露呈されるとき展示情報は議論・批評の対象になる。これが、「過去」は懺悔や郷愁などのノスタルジアの対象ではなく、未来に向かってこの「ゆらぎ」を継承してゆくという意味である。過去との硬直した関係を思い出すのではなく、それを「ゆらぎ」により変化させてゆく可能性がここにある。

文化形成は人々の共通経験、共通理解の上に成立するものであることは言うまでもないが、その基盤は常にこの「ゆらぎ」の上に成りたつべきであることを忘れてはならない。ポストコロニアル的視点においては、博物館および歴史遺跡はこのような「ゆらぎ」を共時的に経験しており、通常、展示においては可視化することはないが、この「ゆらぎ」と対話するためのメディアとして重要な役割を担って行かねばならないのである。そして、ポストコロニアル博物館に関する批評・分析を行うことで、博物館行政・政策に関して具体的な提言を行ってゆくことが、今後の課題であることは間違いがないだろう。

参考文献

- 荒井信一編『戦争博物館』岩波ブックレットNo.328（岩波書店、1994）
清岡卓行『アカシヤの大連』（講談社、1970年）
清岡卓行『アカシヤの大連』（講談社文庫、1988年）
スズキ、テッサ・モーリス著／田代泰子訳『過去は死なないメディア・記憶・歴史』（岩波書店、2004年）
高嶋伸欣『旅しよう東南アジアへー戦争の傷跡から学ぶー』岩波ブックレットNo.99（岩波書店、1987）
田村慶子『シンガポールの国家建設ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー』（明石書店、2000）
松本栄一・香内三郎・水上勉『満州昨日今日』（新潮社、1985年）
陸培春(ル・ペイチュン)『観光コースでないマレーシアシンガポール』（高文研、1997）
呂同挙撮影『大連・古い建物』（大連出版社、2003）
Lee Geok Boi, The Syonan Years: Singapore Under Japanese Rule 1942-1945, National Archives of Singapore and Epigram Pte,Ltd 2005.
The Sakhalin Regional Museum. <http://museum.sakh.com/eng/>